

児童文学におけるキャリア意識

— エミリーはいかにして転機を乗り越えたか —

Career Consciousness in Children's Literature

— How Emily Persevered during Turning Points in her Life —

鬼塚 雅子

ONIZUKA Masako

Abstract

Though Lucy Maud Montgomery (1874-1942) is famous for *Anne of Green Gables* and the series to which it belongs, she herself preferred Emily to Anne. In the autobiographical *Emily of New Moon*, *Emily Climbs*, and *Emily's Quest*, the heroine shares with her creator the desire to be a poet and novelist. Emily is a struggling young writer whose unwavering effort gets her through difficult turning points in her career time and time again. Blessed by her supporters, who assume shared duties as her career counselor and coach, she ceaselessly climbs the Alpine Path, a metaphor for the successful attainment of her goals. In this study, I explore what strategies Emily works out in order to overcome her hardships, how she moves ahead, and how she seizes opportunities. I also suggest how her diary entries and her letters to her dead father function as if career counselors.

はじめに

ルーシー・モード・モンゴメリ (Lucy M. Montgomery 1874-1942) と言えば誰もが『赤毛のアン』(*Anne of Green Gables*, 1908) を思い浮かべるだろう。孤児という逆境にもめげず、明るく元気に前向きな姿勢を持ち続け、豊かな想像力と明晰な頭脳と優れたコミュニケーション能力で周囲を魅了し、仕事も結婚も大勢の子宝も手に入れるアンは長年にわたり少女たちにとって理

想的な主人公であった。アンは貧しい孤児であるが故の苦勞をし、何度も辛い思いを味わい、理不尽な出来事にもたびたび遭遇するが、善意に満ちた人々に支えられ、自ら望むものをほとんど手中に収める。それゆえにキャリアという観点から見ると、アンのお物語は甘すぎる感が拭えない。これには出版社の要請を受けて、作者自身が望まなかった続編を書かなければならなかった事情もある。それに比べてモンゴメリが楽しんで書いたと言うエミリー・シリーズは彼女自身の人生と重なる部分も多く、作家志望の主人公の少女の心理描写が詳細で、リアル感に溢れている。エミリー・シリーズは、アンと同様に、11 歳の孤児であるエミリーが新しい家庭に引き取られるところから物語は始まる。しかし、アンのお子どもたちが適齡期を迎えるまでの長い年月を描くアン・シリーズに対して、エミリー・シリーズは主人公が未婚のまま 20 代半ばの 3 作目でピリオドを打つ。また、エミリーはアンと違って、幼い頃から書くことに喜びを見出し、迷うことなく詩人・小説家になりたいと公言するほどキャリア意識が強い。何度も挫折を味わい、せっかく訪れたチャンスをつかんだり失ったり、自ら手放したりしながら、常に頂上に向かって休むことなく成功を目指して登り続ける。それは作品を書いていた当時のモンゴメリ自身の姿でもある。エミリー・シリーズはモンゴメリの自伝的要素を多く持ち、彼女自身もアンより気に入っており、一般の評価も高い。実際、モンゴメリはシリーズの第一作である『可愛いエミリー』(*Emily of New Moon*, 1923) を書き終えたときに「これまで私が書き上げた中で最高の作品」とし、エミリーを描くことで現実の辛い生活を送る中で生きることが出来たと言っている¹。本稿では、主人公のエミリーが 11 歳から約 15 年の間に何度も転機に会い、悩み迷いながら、時にはくじけ、時には乗り越えて成長していく様子を、ナンシー・シュロスバーグ (Nancy. K. Schlossberg 1929-) の理論を参考に、キャリア意識の視点から考察する。

1. 最初の転機

シリーズの第一作『可愛いエミリー』(*Emily of New Moon*) はエミリーが父の死が近いという事実を知ってショックを受けるところから始まる。早くに亡くなった母親のことはほとんど覚えていない一人っ子のエミリーにとって、最愛の父の死は受け入れがたい人生最大の悲しみである。この「予期せぬ出来事」はエミリーの人生に訪れた初めての転機といえる。

転機 (transition) とは「予測していた転機 (Anticipated transitions)」や「予測していなかった転機 (Unanticipated transitions)」や、「期待していたものが起こらなかった転機 (Non-event transitions)」のことであり、その意味を理解するには、どのタイプに該当するのか、転機の前

後関係あるいは背景、その程度の大きさを識別する必要がある。²

『可愛いエミリー』における転機をあげてみると、父の死、ほとんど面識のなかった親戚との出会い、転居（伯母宅にひきとられる）、初めて学校へ通う（父と一緒に暮らしていた頃は学校へ行っていなかった）、古い会計簿（作文ノートとして愛用していた）を失う、入手が困難な紙が手に入る、親友だと思っていた少女の誕生パーティに招かれない、一生の親友ができる、その親友イルゼの母親の死の秘密を知ってしまう、さらにその死の真相を知る、母親が結婚前に使っていた部屋が自分の部屋になる、亡き父親へ書き溜めた手紙を伯母に勝手に読まれてしまう、日記を書くことにするなど数多くの出来事がエミリーにふりかかる。子ども同士のいざこざや、価値観の違う大人たちとの確執など他人の目から見れば些細な日常生活における出来事であっても、子ども心は痛み傷つき、幼いエミリーが成長するのに多大な影響を与えている。

続編の『エミリーはのぼる』（*Emily Climbs*, 1925）では、14歳になったばかりのときに進学を書くことをやめるかという究極の選択を迫られる、小説の執筆を禁止される、上級学校へ進学する、偏屈なルース伯母の家に下宿する（一時的な転居）、その伯母との衝突、何度も原稿を出版社に送っては没になる、原稿が出版社に採用される、確実にとれるはずの賞（学校で優れた詩作に与えられるもの）をのがす、高額な報酬で作品が高名な雑誌に掲載される、17歳のときニューヨークの出版社に採用されるチャンスが訪れる、数人の青年から求婚されるなど、『可愛いエミリー』に比べると転機の内容はよりキャリア（仕事）に関わるものに変化している。

三作目の『エミリーの求めるもの』（*Emily's Quest*, 1927）では、エミリーの作品に辛辣だが嘘偽りのない批評をしてくれる恩師の死、初めて書いた本を出版拒否される、繰り返し襲ってくる挫折、数人の男性からの求婚、父の友人からの求婚を受諾、そして婚約破棄、階段から転落して瀕死の重傷を負う、執筆意欲の喪失と復活、待望の本の出版、結婚の決意など、転機の内容は作家活動と結婚に絞られている。

こうした転機は誰にでも起こり得る。大事なことはその転機を受け止め、どう対処すべきかである。本稿ではまず最初に、エミリーが彼女にとって人生最初の転機をいかに受け止め、対処したかについて考察する。

エミリーの場合、子どもにとって想像を超える悲しみと衝撃である最愛の父の死の予告を、大嫌いな手伝いの女性エレンから突然聞かされたことは二重のショックだった。エレンは無頓着に、散歩から戻ったエミリーに入り口で突然、父親の命があと1, 2週間だと告げる。しかもそのことに対してエミリーがどれほど衝撃を受けたかなどは全く気づかず、自分は義務を果たしたと自己満足している。その悪気はないとは言え、あまりに思いやりのないやり方で知らされた悲しく

厳しい現実には、エミリーは石になってしまったかのように身動きできなかった。父がいなくては生きていけないと思うほど、そのとき受けたエミリーの心の苦痛は身体中を焼き焦がすかと思われるほど耐え難いもの（“this terrible, burning pain that seemed all over her and yet was not of the body.”³）だった。

父親のダグラス・スターは死ぬ前の数日間を、娘のエミリーと一緒に過ごす。ダグラスはそれまで苦しくて口にできなかった若くして死んだ妻のジュリエットのこと、短かった結婚生活のこと、エミリーの誕生のときのこと、妻の実家の人たちのことなどを、娘にじっくりと話して聞かせる。すでに数年前に自分の病気のことを知ったダグラスは、仕事をやめて、人里離れた小さな家で娘と二人きりで暮らすことにしていた。彼はエミリーに遺言とも言うべき言葉を残す。

“Those years and what I’ve taught you in them are the only legacy I can leave you, Emily. . . .

“We’ll stay together to the very end, then, little Emily-child. We won’t be parted for a minute. And I want you to be brave. You mustn’t be afraid of *anything*, Emily. Death isn’t terrible. The universe is full of love—and spring comes everywhere—and in death you open and shut a door. There are beautiful things on the other side of the door. I’ll find your mother there—I’ve doubted many things, but I’ve never doubted *that*. . . . But I feel *now* that she’s waiting for me. And we’ll wait for *you*. . . we’ll loiter and linger till you catch up with us.” (NM pp.15-16.)

父と一緒にいきたいという娘に、今は無理でもそのうちにそんなことは望まなくなるだろう、人生を怖がらずに進んで行くようにと、父親はやんわりと釘を刺す。ここでエミリーが父の死という大きな悲しい転機を受け入れることができたのは、死んでいく父親自身による娘への愛と論しがあったからである。それは現代的な表現を使えば、カウンセリングに他ならない。娘の今後の生き方に対する心理カウンセリングであり、キャリア・カウンセリングでもある。愛し合う父と娘の間に改めてラポールを築く必要はない。すでに十分になりたった信頼関係の上になされたカウンセリングが功をなしたのだと言えよう。そのことは下記の引用に示されるエミリーの心の変化が証明している。

Emily didn’t know exactly what father meant. But all at once she found that she wasn’t afraid any longer—and the bitterness had gone out of her sorrow, and the unbearable pain out of her heart. She felt as if love were all about her

and around her, breathed out from some great, invisible, hovering Tenderness. One couldn't be afraid or bitter where love was—and love was everywhere. Father was going through a door—no, he was going to lift a curtain—she liked *that* thought better, because a curtain wasn't as hard and fast as a door—and he would slip into that world of which the flash had given her glimpses. He would be there its beauty—never very far away from her. She could bear anything if she could only feel that father wasn't very far away from her—just beyond that wavering curtain. (NM p.16.)

エミリーの父ダグラス・スターは世間的には失敗した男だが、娘の育て方は見事に成功したと評価できる。父のカウンセリングと先祖伝来の忍耐力によって、エミリーは辛いながらも最初の転機を受け入れ、悲しみを乗り越えることができた。無意識のうちに、エミリーの中には彼女の立派な祖先から様々な力—闘う力、辛抱する力、憐れむ力、心から愛する力、喜ぶ力、耐え忍ぶ力—が受け継がれていた (“Emily had inherited certain things from her fine old ancestors—the power to fight—to suffer—to pity—to love very deeply—to rejoice—to endure.” NM p.10.) のである。

ある程度の覚悟はあったにせよ、父の死は11歳の少女に生涯消えることのない痛手を残した。心の落ち着きを取り戻すか戻さないうちに次にふりかかった「予期せぬ出来事」(転機)は、住み慣れた父親との思い出の詰まった家を離れ、赤ん坊の時以来会ったことのなかった親戚—中には冷たい親戚もいる—に引き取られるという、生活の環境における大きな変化だった。子どもは自分の気持ちを口にするには許されない。エミリーはある意味自由奔放に育ったため、堅苦しいヴィクトリア朝の因習に縛られた伯父・伯母たちからは生意気で礼儀知らずな子どもとみなされ、あろうことか、くじ引きで自分の引き取り先が決められたのだった。これほどの屈辱はたとえ子どもでも耐え難いものである。

ナンシー・シュロスバーグによれば、転機を評価する4つの視点に、転機の深刻さ、タイミング、対コントロール力、持続性がある⁴。それらを検討すると、11歳の少女にとって、父の死と見知らぬ土地への転居という転機の深刻さは強力で、ほぼ同時に2つの出来事が起こることからタイミングも極めて悪い。大人でも親の死を平静に受け止め、急な生活の変化に順応しなくてはならないコントロール力を行使するのは厳しい。しかもエミリーの場合その転機は一時的なものではなく、永遠に続くものである。これが大人なら、人生全体の見通し、自己制御力、対処スキル、過去の経験⁵を駆使して、転機を乗り越えられるが、子どものエミリーには経験もスキルもない。それでもこの転機に対処できたのは、先に述べたように、父のカウンセリングと先祖から受

け継いだエミリーの潜在能力のおかげだった。

2. 自立心の芽生え

それまでの児童文学の孤児たちは、中でも少女たちは生きていくために、周囲の大人に愛されることが必要条件だった。生い立ちゆえに最初には問題がある子どもでも、やがて愛らしく成長する。確執のある大人がいても最後には理解されるようになる。そして後見人に見守られ、時には養子となって財産を受け継ぐ。『小公女』(*A Little Princess*, 1905) のセーラや『少女パレアナ』(*Pollyanna*, 1913) のパレアナがその代表であろう。『あしながおじさん』(*Daddy-Long-Legs*, 1912) のジュディのように奨学金など経済的支援を得て成長するケースもある。仕事については女の子の場合は結婚までの短期間のことであり、生涯にわたって仕事をしようとする必要もないし、自覚もない。それは作品の出版当時の社会状況によるもの、当時の人々の考えによるものである。だからアンも結婚後はなんのためらいもなく専業主婦に徹している。しかしエミリーは違う。11歳にして強い自立心が芽生えている。父の死を受け入れ、新しい環境へ順応する覚悟をし、引き取ってくれる伯母達に向かつてはっきり言う。

“I know it was very good of you to bring me to New Moon, Aunt Elizabeth. And I won't bother you long, you know. I'll soon be grown up and able to earn my own living. What do you think is the earliest age a person can be called grown up, Aunt Elizabeth?” (NM p.53.)

現代のように就職の知識も情報もなく、女性への知的職業の場が極めて少ない時代（日本の明治～大正時代に相当する）に、不安や恐れもなく、11歳のエミリーは自立、すなわち自活する意識を持っている。つまりエミリーは自分がやりたいことをはっきり自覚しているのである。エミリーがやりたいこと、それは文章を書くことである。しかし当時、紙は貴重品であったから、書くこと自体が現代のように容易にできることではない難しい課題であった。「心に浮かぶことを書けないならば、胸がはりさけてしまいそうな気になることもしばしばあった」(“There were times that she felt she would burst if she couldn't write out some of the things that came to her.” NM p.80.) というエミリーにとって、書くことは息をすることと同じである。生まれつき書きたいと思う気持ちを消すことは誰にもできない。その思いが強ければ、いつかは願いはかなう。エミリーはやがて偶然の出来事から紙を手に入れるが、それは作者モンゴメリ自身の体験そのまま

であった。

ニュームーン農場に引き取られてから約二ヶ月後、エミリーは将来の職業を具体的に考え、大きくなったら女流詩人か作家になると言い出す。この作品で興味深いのはエミリーの親友達もはっきりした職業意識を持っていることだ。親友イルゼは発声法の教師（“an elocutionist” NM p.103）に、言い換えれば演奏会で朗読をする人（“A woman who recites at concerts” NM p.103）になりたい、自分がそれが上手くできるからとはっきり告げる。同様に、テディは画家を、ペリーは政治家を目指す。子どもたちはお互いに励ましあいながら、2 作目から 3 作目にかけて、それぞれ夢の実現に向けて前進していく。

エミリーが 13 歳になった頃、その将来をどうするかについて親戚たちは相談する。意外だったのは女性の伯母たちより、男性の伯父の方が姪の自立を支援していることだ。もっともその根底には、自分達が姪の面倒を見たくない、自分の子どもだけで手一杯だという本音がある。しかしそれが真実だとしても、当時の男性に以下のウオレス伯父のような考え方の人は本当にいたのだろうかという疑問が残るほど、現代に通じるキャリア意識が述べられている。

“Why, she’ll soon be grown up. She can’t expect you to provide for her indefinitely—”

“—and it’s time we decided what is best to be done for her.”

“The Murray women have never had to work out for a living,” said Aunt Elizabeth, as if that disposed of the matter.

“Emily is only half Murray,” said Wallace. “Besides, times are changing. You and Laura will not live for ever, Elizabeth, and when you are gone, In my opinion, Emily should be fitted to support herself if necessary.”

“I would suggest,” said Uncle Wallace, “that she be sent to Queen’s Academy to get a teacher’s licence. Teaching is a genteel, ladylike occupation. I will do my share in providing for the expense of it.”

“ I’m rather surprised at *you*, Wallace. You did not send your own daughter out to work.”

“*My* daughter had parents to provide for her,” retorted Uncle Wallace pompously.

(NM pp.264-65.)

ここで交わされる伯父と伯母の会話は典型的な当時の人々の考え方を表している。女は働く必要はない、これまでに身内の女性が外へ働きに出たことはないと強く主張するエリザベス伯母の言いは当時の一般的な考え方を代表している。しかし親がいない場合は、ウオレス伯父のように、

時代は変わってきているのだから、必要とあれば自活する用意をすべきだという考え方も認められていたのだろう。いずれにせよ、制限の多かった当時の女性にとって、望ましい上品な職業は教師であり、それには免許を取るための上級学校へ進まなければならないことは確かである。当時の女性が就ける知的職業は数少ない。教師は男性より安く使えるという雇う側からの意図もあって、女性にも開かれていた。しかし、エミリーは格式と伝統を重んじる頑なな伯母により、就職もその前の段階である進学の道も閉ざされる。ここに大きな試練がある。予想していた、というより心の中ではひそかに期待していたことが起こらない転機が訪れる。エミリーは進学のチャンスを失うというショックにもめげず、勉強を続け、受験生以上の知識を身につける。さらに入学試験組に加えてもらえない失望を慰めるために、前にも増して詩作に励む。この転機の乗り越え方は 10 代の少女にしては見事なものである。しかし転機に押しつぶされそうな時もある。

進学のチャンスは見送ったが、女流詩人になりたいというキャリア実現の夢は決して捨てない。原稿を出版社に送ることでその第一歩を踏み出すが、見事に不採用という結果に終わる。エミリーは挫折感と敗北の苦しみを味わうが、その苦しみはおそらく彼女が書き続ける限り、すなわち生きている限り、たとえ有名になった後もずっと続くものである。それは予期していたことが起こらない転機である。エミリーは幼いが故の世間知らずから自分の作品が採用されると思い込んでいたため、その失望はかなり大きいものだった。

Emily threw down the *Enterprise* and fled to the garret dormer where, face downward on the old haircloth sofa, she wept out her bitterness of disappointment. She drained the draught of failure to the very dregs. It was horribly real and tragic to her. She felt exactly as if she had been slapped in the face. She was crushed in the very dust of humiliation and was sure she could never rise again. (NM p.267.)

この打撃から立ち直るのにエミリーは一週間かかった。それでも書くことを諦めることはない。書くことはエミリー自身にも止められない、本能から生じる欲求であり、成功の有無に関わらず、変えられないキャリアの道である。書くことは進学を諦めるという転機を乗り越える原動力であるが、大人たちには理解できず、転機を乗り越えるのに必要な支援が周囲から得られない。エミリーは書かないではいられない、生まれつきなのだと伯母に訴えるが、理解を得ることはできない。

書くことはエミリーにとって喜びであり、書いているときは、何もかも忘れて、太陽と月の間

のすばらしい国をさまよう。しかし、かつての自信作であった原稿も、時が経つと恥ずかしいほど幼い不出来な内容として眼に映る。成長するについて自分の幼い作品の価値が失われ、原稿を焼いてしまう。エミリー自身も認めているように、愛しているものを飛び越えて成長していくことは決して楽しいものではない。 (“Outgrowing things we love is never a pleasant process.” NM p.268) 自分の原稿を否定するのは出版社だけではなく、成長している自分自身でもあるのだ。自分で原稿を焼くという行為をとったとき、また、それまで気持ちの整理のために書き続けてきた亡き父への手紙が意味を失ったとき、エミリーは自分の人生の中のある扉が自分の後ろで閉まり、もう二度と開かれないことを悟る。こうして幼い自分から脱し、過去を後にして、エミリーは10代前半で自立心を高めていく。

3. 支援と戦略

「転機のタイプ、転機のプロセスに関係なく、4つのS (Situation, Self, Support, Strategies) が個人の転機を乗り越える能力に影響を及ぼしている。それぞれのSの内容を吟味していくことで対処に活用できる資源と脆弱な資源を明らかにすることができる。」⁶ エミリーは父の死後、亡母の姉である伯母エリザベスとローラと従兄弟のジミー（本当はエミリーの母親の従兄弟）の3人の大人と一緒に暮らしている。自分の年齢と育ててもらっているという弱い立場から、一方的にエミリーは伯母に服従を強いられ、従っていたが、次第に自己主張を始めるようになる。生意気な子どものエミリーと厳格でマレー一族であることに強い誇りを持つエリザベスは何度も衝突する。その心の底には、愛する末妹が身分違いのしがないジャーナリストと結婚したこと、そのために妹が早死にしたことへの怒りがある。その許せない男の子どもということで、エミリーが書くことには大反対である。なぜなら文才はジャーナリストだった父親の血をエミリーがひいていることの証だからである。

すべてに厳しいエリザベスと正反対なのがジミーである。ジミーはどんなときでもエミリーの味方である。子供の頃、エリザベスとのいさかいで井戸に落ちたことが原因で少々知的障害が残るジミーは、自分も時々詩を口ずさむことから、盲目的にエミリーの文才を高く評価する。さらに作家志望の子どもに何より必要だが当時は高価で入手が簡単ではなかったノートを絶えず提供してくれる。エミリーは自分でノートを買ったことがない。欲しいと思う時期に、書くことは時間の無駄と考えるエリザベスの軽蔑の目をものともせず、ノートはエミリーの前に現実の形となって現れる。エミリーはそれを「ジミー・ブック」と名付けていることから、ジミーの存在が単

なる支援者以上の大きな存在であることがわかる。エリザベスの妹ローラはその中間とも言える存在で、あまり自己の意見を言わず、だいたい姉のエリザベスに従いながら、やさしく姪のエミリーに接する。言語的支援としてはやや弱い、ジミーとローラはエミリーを生涯支え続ける。

孤児と言う存在は周囲の大人に絶対服従すべきであるのが当然とされていた時代に、アンもエミリーもある程度は自分を抑えながらも、どうしても譲れない部分は真っ向から大人に立ち向かう。いずれ世の中に出て行くためには、キャリア意識だけでなく、アイデンティティの確立が必要とされる。自分は自分であるという意識を持つことは、児童文学の始まりと言われる『不思議の国のアリス』(*Alice's Adventures in Wonderland*, 1865) 以来、児童文学の中で取り上げられるテーマの一つであった。エミリーは誰に言われることなく、自分が自分であることにこだわっている。エミリーは物語の最初で、誇らしげに「私は自分にとって大切な人間だ」("I am important to myself," NM p.19) と叫ぶ。さらに、自分を引き取るようになった伯母にはっきりと告げる。

"We must get some things for the child," she said.

"Oh, please don't call me 'the child,'" exclaimed Emily. "It makes me feel as if I didn't belong anywhere. Don't you like my name, Aunt Elizabeth? Mother thought it so pretty. And I don't need any 'things.'" (NM p.47.)

ここがアンと違うところである。アンはたびたび別人になるふりをして楽しむ。初めて会ったマリラとマシュウにコーデリアと呼んで欲しいと言う。だが、エミリーはそのようなことは決してしない。常に自分は自分である。自分以外の誰かになろうとは少しも思わない。それは現実から逃げようせず、常に前向きである姿勢と一致する。これも父親の教え、父親の残した精神品の遺産かもしれない。

2 作目の『エミリーはのぼる』では進学できるか否かという転機が訪れる。ある日、エリザベス伯母は、親戚の同意を得た上で、3 年間の進学を許す代わりに学校で書けと言われたもの以外は一切文章を書いてはならないという条件をつきつける。書くことが命とも言えるエミリーにとって自分がやりたいことは十分すぎるほどわかっている。決断するのに時間はかからない。約束できないとエミリーはきっぱり答える。自分を大切にし、すでに自己分析ができている証明である。教育は受けたいが、「書くことはやめないのではない、やめられないのだ、書かずにはいられない、そういう血が流れているのだ」("I *can't* help writing, Aunt Elizabeth. It's in my blood. . . . I *do* want an education—it isn't pretending—but I can't give up my writing to get it."⁷) と説明しても、残念なことに、エミリーの気持ちは、書くことを下らない書き散らし

（“her scribbling nonsense” C p.10）と思い込んでいるエリザベス伯母には全く理解できない。伯母はまさか姪がノーと答えるとは想像しなかったため、絶句してしまう。エリザベス伯母もエミリーもどちらも譲らず、凍結状態に陥る。皮肉にも頑固な点が2人の血のつながりを証明しているようだ。一族の者は皆エミリーの進学を勧めた。それぞれが費用を分担することも決まっている。今更、とりやめることはできない。時間と紙を浪費する習慣をやめさせようとする計画はエリザベス自身の思いつきだった。プライドの高い伯母としてはひっこみつかない。エミリーはエミリーで書くことは息をするのと同じこと、したがってやめることなど死んでもできない。このエミリーの返事は、伯母にとっても「予期せぬ出来事」、すなわち人生最大の転機である。60代の伯母と10代の姪の両者の転機を上手く対処させる方向へもっていったのはジミーだった。「千人もの先祖をかかえている者が自由になどできない」（“No one can be free who has a thousand ancestors,” C p.80）というジミーの助言はまさに天の声である。そしてエミリーにも伯母にもどちらにも納得する折衷案を思いつく。ジミーはエミリーに、伯母の一番嫌いな小説、すなわち真実でないことを書くことを学校へ通う3年間はやめるという提案をほのめかし、エリザベスには書くことを全部やめさせるという条件は大きすぎると進言する。

“You’ve asked too much, Elizabeth,” said Cousin Jimmy “You’ve asked her to give up *all* her writing—now, if you’d just asked her to give up *some*—Emily, what if she just asked you to give up *some*? You might be able to do that, mightn’t you?”

“What *some*?” asked Emily cautiously.

“Well, anything that wasn’t *true*, for instance.” Cousin Jimmy sidled over to Emily and put a beseeching hand on her shoulder. Elizabeth did not stop knitting, but the needles went more slowly. “*Stories*, for instance, Emily. She doesn’t like your writing stories, especially. She thinks they’re lies. She doesn’t mind other things so much. Don’t you think, Emily, you could give up writing stories for three years? An education is a great thing. Your grandmother Archibald would have lived on herring tails to get an education—many a time I’ve heard her say it. Come, Emily?” (C p.80.)

転機を乗り越えるための支援も戦略もキャリア・カウンセリングに必要な要素である。エミリーはジミーの支援を得て、どうしたら一番いいのかすばやく考える。大好きな小説を書くのを諦めるのは辛い、詩を書いたり、人物の性格描写をしたり、日常の出来事を書くことでなんとかやっていけるだろうと自分を納得させる。キャリアの向上に教育は不可欠である。現代と違って、女

性や孤児にそのチャンスが二度と訪れない可能性は大である。従って、このチャンスを逃すわけにはいかない。支援の担い手である伯母の申し出を拒否することは今後一切の支援をなくすことに繋がる。間に入って折衷案を提案し、伯母と姪の 2 人に同時に転機を乗り越える戦略を編み出したジミーは最大の支援者であり、優れたキャリア・カウンセラーでもあると言えよう。

さらにこのことが皮肉にも後に書くことに必要な訓練をエミリーにもたらすという結果を生む。小学校教師のカーペンターは変人で、手厳しい評価をするが、エミリーにとって極めて優れた助言者であり、指導者である。カーペンターは思う存分、言いたい放題の批評をする。しかしその批評に間違いはなく、「たとえ一時心に火ぶくれが出来るようなことを言われても、その判断にエミリーは信頼をおいていた。」（“... Emily had confidence in his verdicts, even when he said things that raised temporary blisters on her soul.” C p.85）これもまたキャリアに不可欠な支援である。ジミーが甘口の支援者ならば、カーペンターは激辛の支援者である。そのカーペンターは書き手には抑制と節約が必要であるという。そのため、エミリーが呆れるほど、進学のために交わした伯母との約束に賛成を唱える。カーペンターによれば、小説を書くことをしばらく辞めることはエミリーに必要な抑制と節約を学ぶいいチャンスだというのだ。偏見の塊である伯母の計画とジミーの戦略が思わぬ副産物を生む結果を招くことになるのは、皮肉ながら面白い。タイトルにある「のぼる」という言葉はこのときのカーペンターの口から始めて出る。

“However, your ancestors They’ve simply laid it on you to aim for the heights and they’ll give you no peace if you don’t. Call it ambition—aspiration—*cacoethes scribendi*—any name you will. Under its sting—or allure—one has to go on climbing—until one fails—or—” (C p.87.)

親友達とともにエミリーが進学した学校は教職課程がないため、アンとは違ったキャリアの道を進むことになる。3 年間真面目に勉強し、優秀な成績を収める一方で、相性の悪い伯母ルースの家での下宿生活、意地悪な上級生の悪意に満ちたいたずら（単にいたずらと言うには限度を越えているものもある）、えこひいきする教師、繰り返される作品（詩）の不採用の知らせ、小説をかけないもどかしさ、こうした出来事に対して常に前向きに取り組み、人生に光を求め、見つけだそうとする。小説を書きたくてたまらないができないという辛さが日ごとに増していく。いくつもの挫折と悪意が重なってどうにもならなくなったぎりぎりの限界に達したとき、自分の作品が採用されるという「栄光の瞬間」（“A Supreme Moment”⁸）がエミリーに訪れる。それは進学を許されたこと以上に、人生の上で大きなプラスの転機であった。

Emily dropped the letter and seized upon the magazine with trembling fingers. She grew dizzy—the letters danced before her eyes—she felt a curious sensation of choking—for there, on the front page, in a fine border of curlicues, was her poem—“*Owls’ Laughter*,” by Emily Byrd Starr.

It was the first sweet bubble on the cup of success; and we must not think her silly if it intoxicated her. . . .

Oh, bliss—oh, rapture! The world was hers—the *Alpine Path* was as good as climbed. What signified a few more scrambles to the summit? (C pp.120-21.)

This was one of her glorious moments. She felt a wonderful lightness of spirit, a soul-stirring joy in mere existence. The creative faculty, dormant through the wretched month just passed, suddenly burned in her soul again like a purifying flame. It swept away all morbid, poisonous, rankling things. (C p.122.)

「アルプスの道」はエミリーの作家として頂上を目指す道である。エミリーはすでに「私はアルプスの道を登って、自分の名を名誉の巻物の中に書いて来る」(“that I would ‘climb the Alpine Path and write my name on the scroll of fame.’” C p.230) という誓いをたてていた。この後、合言葉のようにこの「アルプスの道」がたびたび現れる。“I’ll keep on climbing!” (C p.230) という言葉にあるように、エミリーはひたすら登り続けていく。

4. 選択と決断

卒業を前にして、エミリーに就職のチャンスが訪れる。またもやキャリアの大転機である。20年前に合衆国へ行き、大きな婦人雑誌の文芸記者となり、ある小説の出版社の原稿選定委員であるジャネット・ロイヤルと会ってその会見記を書く機会が与えられた。そのとき、ミス・ロイヤルはエミリーをニューヨークへ誘う。雑誌の編集部の空席にエミリーを迎え入れるというのだ。作家を目指す若い女性にとってまさに天にも昇るチャンスである。ミス・ロイヤルは10年以内にエミリー・バード・スターの名はアメリカの雑誌が競争してとりたがるようになるという成功を断言する。あまりの素晴らしい申し出にエミリーは肝をつぶし、混乱の余り、思考することもできなくなってしまう。それはあたかもミス・ロイヤルが突然彼女の手へ黄金の鍵を渡して、魔法の扉を開き、夢と希望と想像の世界へ行けといったようなものだった。その扉の向こうには彼女が望んだあらゆる成功と名声があるのだ。(“she *must* turn the key and open the magic door

beyond which now seemed to lie all the beauty and allurement of life” C p.268.)

千載一遇のチャンスでも、未成年であるエミリーには保護者であるエリザベス伯母の承諾が必要とされる。ミス・ロイヤルは伯母が承諾すると自信満々で、自分が説得するとも申し出る。ここで見落とせないのは、エミリーの就職のチャンスが、「生活をたてるために働く」のではないことである。ミス・ロイヤルはそのことをエリザベス伯母に強調し、下記にあるように「専門」という言葉を使って、エミリーの仕事がレベルの高いものであること、エミリーに才能があること、自分の申し出がチャンスであることを説明する。しかし、ミス・ロイヤルがどれほどの成功を収めていても、未婚であることを理由に伯母は彼女の真価を認めないし、エミリーの就職もなかなか承諾しない。

“It isn’t exactly what you would call ‘working out,’ dear Miss Murray,” said Miss Royal, “Thousands of women are going into business and professional life, everywhere.”

“I suppose it’s all right for them if they don’t get married,” said Aunt Elizabeth.

Miss Royal flushed slightly. She knew that in Blair Water and Shrewsbury she was regarded as an old maid, and therefore a failure, no matter what her income and her standing might be in New York. But she kept her temper and tried another line of attack.

“Emily has an unusual gift for writing,” she said. “I think she can do something really worth while if she gets a chance. She ought to have her chance, Miss Murray. You know there isn’t any chance for that kind of work here.” (C pp.270-71.)

しかし奇妙なことに、エリザベス伯母はこれまでのように頭ごなしに反対するのではなく、ありとあらゆる親族にエミリーの将来（ニューヨークへ行って仕事に就くべきか否か）について相談する。そして出した結論は、エミリーが行きたければ言ってもよいという、これまでの伯母からは想像もつかない、消極的にせよ許可であった。つまり、もう幼い子どもではないと思った伯母はエミリー自身に転機の決断をゆだねたのである。そして誰もがエミリーがイエスと答えると思っていたとき、今度はエミリーに迷いが生じた。エミリーもまた伯母と同様に恩師や友人、出入りの行商人にまで意見を聞く始末であった。エミリー自身、なぜ自分がすぐにミス・ロイヤルにイエスの返事を書かないのかわからなかった。おそらく二度とこのような機会は巡ってこないことがほぼ確実であることを十二分に自覚していたにも関わらずである。

“Why should I want help?” thought Emily desperately. “What has got into me that I can’t make up my own mind? Why can’t I *say* I’ll go? It doesn’t seem to me now that I *want* to go—I only feel I *ought* to want to go?”

“Of course I’ll go,” she said aloud to herself. Perhaps the spoken word would settle things. “What would I do next year if I didn’t? Aunt Elizabeth will certainly never let me go anywhere else alone. Ilse will be away—and Perry—Teddy too, likely. He says he’s bound to go and do something to earn money for his art study. I *must* go.”

She said it fiercely as if arguing against some invisible opponent.

“Of course I’ll go,” she said again—feeling that if she could only have left off the “of course” the thing *would* have been settled. (C p.274.)

上記の目に見えない反対者とは他ならぬエミリー自身である。言い換えればエミリーの内なる声である。内なる声と繰り返し問答をしたあげく、つまり、自分自身でキャリア・カウンセリングをしたあげく、ついにエミリーは行かないと決心する。このエミリーの自問自答はすさまじい自己分析である。ここまで自分を見つめ、内なる声をきくには相当な苦しさを伴う。自分がニュー・ムーン（引き取られた伯母の家と土地）を愛しているため、自分の中の一部は行きたがっているが、その奥の部分は行きたくないと言っていると分析する。それは、今ニューヨークに行かなければ一生目が出ないのではないかという不安もある一方で、心の奥底には自分でもよく分析できない躊躇いがあるということへの気づきである。そこにはエミリー、実は作者自身の愛国心が根強く存在している。エミリーがモンゴメリの分身なら、ミス・ロイヤルがカナダ人として祖国が重大な岐路に差し掛かっていることに無関心であることに強い違和感を抱いたのである。また、ニューヨークへ行くことでミス・ロイヤルのように結婚できないかもしれないという不安もある。なぜなら、先に取り上げた伯母と問答にあったように、結婚していない女性はどうなにも高い地位や収入を得ても、当時のプリンス・エドワード島では人生の落伍者だと見なされており、そのことをミス・ロイヤル自身、恥辱だと思っていることにエミリーは気づいたのである。エミリーにとってもモンゴメリにとって結婚は人生に不可欠なものであり、カナダ人であることや、スコットランド系の先祖を持つ誇り高い一族の生まれであることが自己のアイデンティティを支えているものであることは作品を通して伝わってくる。

迷いに迷った挙句に出したノーの返事にミス・ロイヤルは非難を浴びせる。その言葉にはっきりとキャリアという用語が出てくる。ミス・ロイヤルは「キャリアのチャンスを捨てる大馬鹿だ」(“You are simply throwing away your chances of a career.” C p.276) とエミリーを責めるの

である。ニュー・ムーン農場のあるブレア・ウォーター (Blair Water) のような地方では小説の材料がない、雰囲気 (atmosphere) が無いというミス・ロイヤルにエミリーは自分で雰囲気を作ると反論する。エミリーはキャリアは自分で築くもの、背景でなく、自分の心だというのだ。たとえ、地方にいても、遠くを見ることができる、地元で成功できないのなら、大都会 (ニューヨーク) でも成功しないだろうと断言する。

“I can see farther than that,” said Emily, putting up her chin. “I can see to the stars.”

“. . . , I know life is rather cramped here in some ways—but the sky is as much mine as anybody’s. I may not succeed here—but, if not, I wouldn’t succeed in New York either. Some fountain of living water would dry up in my soul if I left the land I love. I know I’ll have difficulties and discouragements here, but people have overcome far worse. (C pp.277-78.)

エミリーは今後、この決断にたびたび後悔することがあることを十分に認識している。都会の出版勤務という経験なしに、成功という頂上を目指してアルプスの道を登ることがどれほど困難であるかも承知してる。それでもニュー・ムーンに留まる決心をする。なぜならエミリーは自分を信じているからだ。何年も前のこと、眠っているエミリーの上に父がかがみこんで、“She will love deeply—she will suffer terribly—she will have glorious moments to compensate” (NM p.17) と予言したように、エミリーは深く愛し—激しく苦しみ—それを償う栄光の瞬間を味わうことを確信しているのである。

5. 自分と向き合う

第3作『エミリーの求めるもの』(*Emily's Quest*, 1927) は学業を終えたエミリーが伯母たちの家に戻ってからの生活を描いた作品である。一見穏やかそうだが、時代の流れによる取り巻く環境の変化は避けられない。エミリーはそれに自分を合わせながら、一人で執筆活動が続ける。7年間一緒だった親友イルゼと思いを寄せているテディの二人はモンリオールの学校へ行き、もう一人の友達ペリーはシャーロットタウンの法律事務所へ働きに行ってしまった。一人残されたエミリーは覚悟はあったものの、ミス・ロイヤルが予想していた通り、ニューヨークへ行かなかったことをたびたび後悔する。この苦しみを受け止めてくれる人はいない。ジミーは温かい盲

目的支援者であるが、大人になったエミリーにはその支援力は物足りない。そのような彼女のカウンセリングを勤めるのは日記帳である。日記帳は、第一作の終わりに書き始めており、二・三作目はエミリーの日記からの抜粋が作品の半分ほどを占めている。

Her diary had become a dominant factor in her young, vivid life. It had taken the place of certain “letters” she had written in her childhood to her dead father, in which she had been wont to “write out” her problems and worries—for even in the magic years when one is almost fourteen one has problems and worries, especially when one is under the strict and well-meant but not over-tender governance of an Aunt Elizabeth Murray. Sometimes Emily felt that if it were not for her diary she would have flown into little bits by reason of consuming her won smoke. The fat, black “Jimmy-book” seemed to her like a personal friend and a safe confidant for certain matters which burned for expression and yet were too combustible to be trusted to the ears of any living being. (C pp.9-10.)

上記の引用にあるように、日記にエミリーの生活のはつらつとした原動力となっており、幼いときに亡父に宛てて書いた手紙の代わるものとなっていた。日記はエミリーが安心して心の内を打ち明けられる親友であり、心の声をそのまま全て受け止めてくれるカウンセラーである。そしてそれに応えるのはエミリー自身の内なる声である。学校教育と就職のチャンスが第2作目の『エミリーはのぼる』での大きな転機だとすれば、第3作の『エミリーの求めるもの』では念願の本の出版と結婚（結婚がようやく決まるところでシリーズは終わる）が中心となる転機である。

作家を目指すエミリーはモンゴメリと違って、編集者に要求された売れる作品を書くことを拒否する。アルプスの頂上を目指しながら、ついに念願の本を書く。はじめは書いてだけで満足していたが、やがて何度も不採用となることに苦しむ。年長の友人に意見を求めたが、酷評され、エミリーは本を燃やしてしまう。その行為はまるでわが子を手にかけてようだった。その悲しみが引き金となってエミリーは階段から落ち、足にハサミがつきささるという大怪我をする。半年間動けない身体となり、敗血症で生死の間をさまよう。この大怪我はエミリーから書く力を奪うというかつてないマイナスの転機をもたらす。

“My days of laughter are done,” Emily said to herself. And her days of creation as well. She could never write again.⁹

... , I cannot write. I have tried repeatedly and failed. The old creative fire

seems to have burned out into ashes, and I cannot rekindle it. All the evening I tried to write a story—a wooden thing in which wooden puppets moved when I jerked the strings. I finally tore it into a thousand pieces, and felt that I did God service. (Q p.91.)

書くことを考えるのは、本となるはずだった原稿を焼き捨てたことを思い出すのと同じだった。そのことはエミリーにとって我慢できないほどつらいことだった。周囲の支援の声も彼女の心には届かない。やや自暴自棄になっていたエミリーは父親ほどの年上の男性と婚約までする。恐らく読者が最もはらはら心配する場面である。ところが不思議な夢を見て自分が誰を愛しているか自覚したエミリーは婚約を破棄し、周囲の大顰蹙をかう。それ以後は何をやっても気まぐれだと非難される。しかし婚約を解消し、自分の心に忠実になったとたん、エミリーに再び書く力と想像の喜びが蘇る。それはエミリーにとって奇蹟だった。突然、書けるという喜びの光が差し込む。エミリーにとって書くことは仕事であり人生である、つまり広義のキャリアそのものである。エミリーは「私たちに合った仕事は—それをするためにこの世に送られたと知る仕事は—それは本当に祝福で満ちたりた遊びである」(“But the work for which we are fitted—which we feel we are sent into the world to do—what a blessing it is and what fulness of joy it holds.” Q p.93)と確信し、ペンは友達のように思えた。

書く喜びは戻ってきても、物語はすぐにハッピーエンディングとはならない。喜びとともに苦しみも再び襲ってくる。またも執筆活動に切り離せない原稿の不採用という不本意な出来事が繰り返してやってくる。そして次第に絶望していく。弱音を吐き、逃げ腰になることもある。そのような状況を脱しようと、小さなことでも大きく喜ぶことでマイナス転機を乗り越える努力をする。それがエミリーの楽しく人生を生きるコツである。しかしその後も長い長いスランプが続く。それでも少しずつだが生活できるだけの収入が入ってくる。そのような日々をエミリーは「鍋料理のありふれた生活」(“a tepid existence of pot-boiling” Q p.134)と呼び、その生活に落ち着こうと不本意ながら自分に言い聞かせる。その頃、ミス・ロイヤルからエミリーが自己満足と周囲の身最良な賞賛で後退しているという戒めと再度ニューヨークへの誘いが届く。そこでエミリーは6年前にニューヨークへ行っていたら本が出版できただろうかという疑問に苦しむ。しかし同居の伯母達が高齢であることから、島を離れる決心はつかない。

24歳の誕生日に、作家エミリーに一大転機をもたらす手紙が届く。ついに待望の本が出版されることになったのだ。

There lay her book. *Her* book, spleet-new from the publishers. It was a proud, wonderful, thrilling moment. The crest of the Alpine Path at last? Emily lifted her shining eyes to the deep-blue November sky and saw peak after peak of sunlit azure still towering beyond. Always new heights of aspiration. One could never reach the top really. But what a moment when one reached a plateau and outlook like this! What a reward for the long years of toil and endeavour and disappointment and discouragement. (Q p.153.)

大都会にいるミス・ロイヤルからも「ニューヨークへ来なくてよかったのだ、あなたの本は都会には咲かない野バラのようだ」とその本は絶賛され、長い茨の道のりの後、エミリーのキャリアの選択は正しかったことが証明された。そしてエミリーにとってはどんなに賞賛してくれる世評よりも、支援してくれたジミーとエリザベス伯母の素朴な誉め言葉の方が価値あるものであった。

おわりに

エミリーのキャリア意識は早くも 11 歳ですでに芽生えていた。自分でも意識することなく、エミリーには仕事をしたい気持ち、自分が何をやりたいのか、自分の特技 (スキル) は何なのか、幼い時から自己分析ができていた。時にはそれでいいのかと迷い、悩み苦しむが、アルプスへの道と称して、頂上を目指して登り続ける。彼女にとって頂上とは作家としての成功であり、そこへ辿り着く道が長く険しくことは誰よりも承知している。しかもその頂上はなかなか見えない。しかし自分を見失うことは決してない。エミリーは頑固とも言えるほど意志が強く前向きであるが、同時に非常に繊細で情緒豊かでもある。必要以上に物事を深く捉え、自ら悩み傷つくことも多い。そのような時に必要なのは相談相手、助言者、支援者であるが、これらは現代のキャリア・カウンセラーにあたる。エミリーには盲目的に彼女の才能を信じる従兄弟のジミー、書き続けるように勧めてくれたカッシディ神父、何度も衝突しながら最後には味方となる伯母たち、エミリーを大人扱いして自由を満喫させてくれるナンシー大叔母、お互いに言いたいことを言い合える親友エリゼ、毒舌だが真実の批評をしてくれる型破りの教師カーペンターなど複数の登場人物がカウンセラーの役割をそれぞれ分担している。しかし相手が人間である以上、100%本心を見せるわけにはいかない。そのためにエミリーに必要なだったのは、幼いときは亡父への手紙、少し成長してからは日記である。どちらも一方通行であるが、心の全てをさらけ出せる相手として、文章を書くことが生きることであるエミリーにとって不可欠な存在だった。言い換えれば、最強の

キャリア・カウンセラーである。本来、キャリア・カウンセリングの場合、カウンセラーはクライアントを全面的に信頼し、共感的理解を示すことで、クライアント自身から問題の答を引き出すのが最適とされている。手紙や日記はまさにそういう役割をしている。悩んだとき、苦しいときに胸のうちの訴える。書いているうちに次第に気持ちが静まり、冷静に自分を見つめなおすようになる。そして最後には自分が求める答に気づく、あるいはその方向性を見つけ出すのである。つまり、物言わぬ手紙や日記はクライアントに自ら最適な答を与えているのである。

作者モンゴメリーも9歳のときからずっと日記を書き続け、死後出版されている。彼女は1904年1月に日記を書くのは寂しい人である¹⁰と書いている。モンゴメリーは友人や才能や美しいカナダの自然に恵まれていたにも関わらず、孤独感は拭えず、日記を「絶対の信頼のおける腹心の友」(“a personal confidant in whom I can response absolute trust”¹¹)と見なしていた。おびたしい数の作品を執筆しながらも、日記を書いていたのは、彼女にとって心の奥深くにある苦しみや不満のはけ口となる「生涯を通じての精神の安全弁」(“a safety valve that served Montgomery all her life”¹²)の役割を果たす必要不可欠なものだったからだ。

エミリー・シリーズはエミリーが幼友達でずっと慕ってきたデディ・ケントとの結婚を決意するところで終わる。アンと違って結婚後の生活を描く続編は書かれていない。エミリーが結婚後も作家活動が続けるのか否か、続けるにしても家庭第一なのか、それともさらなる成功を遂げるのかは読者の想像に任されている。作家モンゴメリーが自分の分身として「こうありたかった自分」をエミリーに託しているならば、自らの才能を信じて進む主人公がいつまでも頂上を目指して登り続ける姿でシリーズを終えることが最適なエンディングだったのではないだろうか。

《 注 》

- ¹ Rubio & Elizabeth Waterston, ed. *The Selected Journals of L. M. Montgomery, volume III*, (Toronto : Oxford University Press, 1992) p.39.
- ² 渡辺三枝子編著 『新版 キャリアの心理学』(ナカニシヤ出版、2007) pp.135-36.
- ³ L. M. Montgomery, *Emily of New Moon* (London : Harrap Books, 1977) p.10. 以後、この作品からの引用はNMとページ数を文中に記す。
- ⁴ ジョアン・ハリス・ボールズビー、日本マンパワーCDA研究会編著『キャリアカウンセラー養成講座 テキスト2』(株)日本マンパワー) p.45.
- ⁵ Ibid.
- ⁶ 渡辺三枝子編著 『新版 キャリアの心理学』 pp.137-38.
- ⁷ L. M. Montgomery, *Emily Climbs* (London : Harrap Books, 1979) p.78. 以後、この作品からの引用はCとページ数を文中に記す。
- ⁸ “A Supreme Moment”は *Emily Climbs* の9章のタイトルである。

-
- ⁹ L. M. Montgomery, *Emily's Quest* (London : Harrap Books, 1979) p.54. 以後、この作品からの引用はQとページ数を文中に記す。
- ¹⁰ Mary Rubio and Elizabeth Waterston, ed., *The Selected Journals of L.M. Montgomery, volume I* (Toronto: Oxford University Press, 1985) p.292.
- ¹¹ Ibid., p.xx.
- ¹² Ibid.

《参考文献》

- L. M. Montgomery, *Emily of New Moon* (London : Harrap Books) 1977
- L. M. Montgomery, *Emily Climbs* (London : Harrap Books) 1979
- L. M. Montgomery, *Emily 's Quest* (London : Harrap Books) 1979
- L. M. Montgomery, *Anne of Green Gables* (London : Puffin Books) 1977
- L. M. Montgomery, *Anne of Avonlea* (London : Puffin Books) 1979
- L. M. Montgomery, *Anne of the Island* (London : Puffin Books) 1981
- L. M. Montgomery, *Anne of Windy Willows* (London : Puffin Books) 1983
- L. M. Montgomery, *Anne's House of Dreams* (London : Puffin Books) 1981
- L. M. Montgomery, *Anne of Ingleside* (London : Puffin Books) 1983
- Mary Rubio and Elizabeth Waterston, ed., *The Selected Journals of L.M. Montgomery, volume I , II* (Toronto: Oxford University Press) 1985
- Rubio & Elizabeth Waterston, ed. *The Selected Journals of L. M. Montgomery, volume III*, (Toronto : Oxford University Press) 1992
- Mollie Gillen, *The Wheel of Things : A Biography of L. M. Montgomery* (Toronto : Fitzhenry & Whiteside Ltd.) 1975
- 渡辺三枝子・E.L.ハー 『キャリアカウンセリング 入門人と仕事の橋渡し』ナカニシヤ出版、2005
- 渡辺三枝子 編著 『新版 キャリアの心理学』ナカニシヤ出版、2007
- 木村周 『キャリア・カウンセリング：理論と実際、その今日的意義』改訂新版、社団法人 雇用問題研究会、2007
- 宗方比佐子・渡辺直登 編著 『キャリア発達の心理学：仕事・組織・生涯発達』川島書店、2003
- 松山一紀 『組織行動とキャリアの心理学入門』大学教育出版、2009

ジョアン・ハリス・ボールズビー、日本マンパワーCDA研究会編著『キャリアカウンセラー養成講座 テキスト1～6』（株）日本マンパワー